

要介護者と介護者の関係を悪化させる誘因の検討

Considering factors that worsen the relationship between an aged person and the caregiver

市川 愛望^{1, 2}, ○渡辺 修宏²

(株) アズパートナーズ (予)¹, 国際医療福祉大学²

Manami, Ichikawa & Nobuhiro Watanabe

AS PARTERS, International University of Health and Welfare

keywords: 要介護者, 介護者, 介護関係

研究背景と目的

我が国では1970年代以降、人口に占める高齢者の割合の増加が顕著となり、高齢化の上昇に伴って介護を必要とする高齢者も増え、その高齢者の介護を担う者の負担も大きくなってきている。事実、彼らが担う介護負担などに関わる様々な社会問題が明らかとなってきている。介護負担の問題と一口にいても、実に多様な実態が呈されているが、どのような様相、あるいは形態にせよ、つまるところは要介護者と介護者との関係の問題に集約される。両者の関係になんらかの問題が生じ、それが放置され続けると介護関係悪化に発展し、徐々にその破綻につながる可能性が高くなるのである。両者の関係悪化を紐解き、予防ないし改善を図ることは、現代社会の喫緊の課題といえる。

本研究は、要介護者とその者の介護を担う介護者の関わりに焦点をおき、その関係を悪化させる誘因について検討する。そして、要介護者とその者の介護を担う者が関係悪化を引き起こすことなく、良好な状態を形成・維持するために必要な関わり方を検討する。

方法

参加者: 在宅場面等における介護者と要介護者が本研究の最も望ましい対象者である。しかし、本研究の目的に即してそのような対象を確保することの倫理的な問題と、コロナ禍に伴う影響を加味して、介護施設等に勤め、介護経験のある職業介護者とその対象者をも近似者として参加者に含めた。結果、Snowball sampling によって6名の参加者を得た。

手続きと期間: 本研究は留め置き法に基づく、半構造化面接を実施した。参加者の承諾を得た上で、IC recorder を用いて調査場面を録音し、また、メモで記録した。調査は、それぞれの参加者と第1著者との一対一で実施された。調査期間は、2021年7月から8月までの、約2か月間であった。

質問項目: 構造化された質問項目は8つであり、介護を行う際の介護者の「思い」や、要介護者と介護者の関係悪化の具体的事例について問うた。

分析: 面接で得たデータ(逐語録)から、要介護者とその介護者の関係をあらわす内容をコード化し、質問項目ごとにマトリクスに当てはめて事例別整理を行った。

倫理的配慮: 参加者へ調査協力の依頼を行い、承諾書を得て、データの匿名化を図るとともに、いつで

も彼らが研究参加を辞退できる旨を伝えた。

結果

質問項目3(1)から得られた情報を表1に示す。縦軸が参加者、横軸が聞き取った出来事を分類している。なお、備考欄には、参加者から聞き取った言葉(質問項目に対して重要であると筆者が判断した内容)を付記した。

表1. 要介護者と介護者の関係悪化の流れ

参加者	介護者	要介護者	どのような状況	どんな行動	行動の結果	備考
1. Aさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	ベッド全体のシーツ交換をする。お父さんに認知症があること、洗濯物の仕事が増えるため、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
2. Bさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
3. Cさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
4. Dさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
5. Eさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	
6. Fさん	居宅のケアマネジャー	認知症の父	居宅のケアマネジャーに「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	「お父さんが認知症で困っています」と相談した。その話をケアマネジャーが聞き、居宅が気になる。	居宅と居宅の関係が悪化する。	

考察

要介護者と介護者との関係悪化の誘因として、介護者の都合優先が考えられた。これは、対象者のための生活ルールを含む、介護者の主観的判断と言えよう。そもそもその生活のルールは、その要介護者の生活を円滑にするために設けられたものである。しかし、介護者がルール順守を徹底しようとする時、逆に要介護者の営みに悪影響を与える可能性が示唆された。そのルールの存在意義の振り返りが、都度必要なのかもしれない。

加えて、介護者にとって身体的、精神的な負担、あるいは時間的制約等が高まった時に、介護に対してネガティブな感情を抱く可能性が示唆された。このネガティブな感情は、いわゆる介護のストレスであり、介護者にストレスが蓄積されると、要介護者に対する暴力的な何かが出される恐れが高まり、これが要介護者と介護者の関係悪化を招くのではないだろうか。